

花月吟（藤野君山）

花屋 琴を 弾ず 千嶂の 月

月楼 笛を 弄ぶ 万林の 花

花香 漠々たり 花天の 月

月色 朧々たり 月地の 花

花下 詩を 哦うて 君 月に 対し

月前 酒を 温めて 我 花を 看る

花 開き 花 落つ 古今の 月

月 去り 月 来る 晨夕の 花

花屋彈琴千嶂月 月樓弄笛萬林花
花香漠漠花天月 月色朧朧月地花
月下哦詩君對月 月前溫酒我看花
花開花落古今月 月去月來晨夕花

解説 花を愛し、自然を愛した作者が、花と月の光景と、それをめぐる心情を詠じたもの。

語釈 ※花月吟 花と月との吟。 ※花屋 花を鑑賞する館。花を眺める場所。

※千嶂 峻しく連なる峰々。ここでは、月の光によって陰影の濃くなったさま。

※弄 管絃の楽器を吹き、弾ぐことをいう。 ※万林 数え切れないほどの本数の林。

かぎりなく広い林。 ※花香 花のかおり。 ※漠漠 散り敷くさま。また広大で果て

ないさま。 ※月色 月光。 ※朧朧 おぼろなさま。 ※農夕 農昏。朝夕。旦暮。農暮。

通釈 花見の館にあつて、琴を弾じながら、遠く長びく山の稜線の上に輝く月を仰ぎ、月見の楼にあつて、笛を吹きながら、幾重にも咲いた花を見やれば、その花の香は馥郁とひろがって、天の月の光に達し、月はおぼろな光を放って地上の花を照らしている。風流な君は、花に興じ、詩を吟じて、月を仰ぎ、自分は月光の中に酒を温めて花を見る。花は開き、また散る。その花を照らす月は昔も今も同じ。月が沈みまた昇る、その月に照らされる花は朝に開き夕に落ちるのだ。